



沖縄テレビ報道部副部長

## 豊田 健吉

一般的に沖縄は、資源に乏しい場所と言われる。全体的に隆起珊瑚礁からなる島々は、貴金属や宝石など価値のある鉱物資源とは無縁との先入観があるようだ。しかし、つぶさに調べれば必ずしも資源が不毛の地ではない。かつて明や清国との主要な貿易品として硫黄島産出の硫黄が輸出されていたし、明治になれば尖閣諸島の開拓に伴い夥しく生息して、たゞひとりの羽毛などが歐米に輸出され好評を博してた。

尖閣諸島の開拓者、古賀辰四郎の報告によれば、最盛期の明治四十四年には羽毛や鳥の製皮、鳥油など三十八万七千八百四十円の

収入を記録している。警察官の月給が二十一・三十円の頃であり、古賀は、沖縄県の産業振興の功績により藍綬褒章を下賜されて

いる。

しかし、規模が大きかつたのが「サ島の焼鉱山」である。しかも、東京に本社のある一部上場の化学会社「サ工業の八十年史」によれば、最盛期の大正五年には約二百四十万円の売り上げを記録している。「サ島は南大東島の南約八十キロに位置する絶海の孤島であるが、約二千人の鉱夫が働いていた」ともあり、記録に見る限り、戦前戦後を通じて、沖縄最大の鉱山と言えるだらう。残念ながら、先の戦争で放棄され現在は米軍の射爆場となつている。沖縄で高品位の黄銅鉱で金銀が附隨して産出していく鉱山が在つたことは、ほとんど知られていない。ケニア諸島の屋嘉比島の銅鉱山で、明治初期に尚家が開発に着手したが、

後に沖縄で実績のある前出のサ島の鉱脈は概ね良好で東海岸にはかなりの富鉱が発見され、慶良抗と命名されたが、米軍の上陸で壊滅した。四件の事例を上げたが、これらの資源は、何れも無人の孤島に存在したことが特徴となつてゐる。なぜ、沖縄本島には資源はないのだろうか。本島では本土復帰の直前あたりから、地下の天然ガスが注目されたが、残念ながら期待外れに終わった。沖縄南部の島尻層と呼ばれる地層には天然ガスが含まれ、温泉と共に噴出する」とが知られている。最近になり、温泉の企業化に成功したのが、宜野湾市大山にある「アロマ」である。宜野湾農協が経営する温泉であるが、地下一千三百メートルから口温一千四百トン、四三度の温泉と約三千六百立米の天然ガスが噴出する能力がある。温泉は同社では使いきれない量であり、隣接する「タナガーテンホテルの温水プールに供給出来れば、合理的な利用法だと思つがどうだか。沖縄の標準家庭の力の使用量は一日当たり一立米程度であるから、一人アロマは約三千六百立米の熱量を備える計算である

が、今のところ空中に放散されてしまう。沖縄は、今注目の海洋深層水の揚水が比較的容易に出来るところの優位性がある。このように見てくると沖縄には利用出来る資源が眠つてゐるのであり、有効に活用される日を待つてゐる。